

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：34516

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593354

研究課題名(和文) 不妊治療後の母親のペアレンティング・プログラムの開発と普及

研究課題名(英文) Development and Dissemination of Parenting Programs for Mothers

研究代表者

宮田 久枝 (miyata, hisae)

園田学園女子大学・健康科学部・教授

研究者番号：70249457

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：不妊治療によって子どもを得ることは喜ばしいことと捉えられているが、体外受精胚移植での母親の、産後4か月までの縦断調査から子どもとの愛着形成の遅延、母親の疲労、児の体重増加不良等、困難な状況がみられた。そこで、不妊治療に臨む親の子どもを持つことへの切望を「強み」として捉え、積極的な支援の立場から、母親が早期に子どもとの関係を形成し愛着を深めるよう、不妊治療によっての妊娠成立から産科への移行期に焦点を当てたプログラムを編纂した。内容は、これまでの経過、胎児の成長・発達、母子健康手帳等の手続き、産科への転院、妊娠経過とし、生命に対する医療者の価値観も存在することから出生前診断についても記載もした。

研究成果の概要(英文)：Although having a child after going through infertility treatment is taken as joyous, difficult situations have been observed for mothers in longitudinal research up to 4 months after giving birth, who underwent In-vitro fertilization and embryo transfer. These difficulties included delay of attachment formation, maternal fatigue, and poor infant weight gain. Therefore, regarding the desire to have children as a strength of parents facing infertility treatment and to actively support the mother, we compiled a program focused on the transition from achievement of pregnancy through infertility treatment to the maternity period, so the mother forms a relationship with the child early and deepens attachment. The content includes the course thus far, growth and development of the fetus, application procedures for a maternal and child health handbook, transfer to the maternity unit, and the course of pregnancy.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：体外受精 ペアレンティング 子育て支援 母親 不妊治療

1. 研究開始当初の背景

現代、女性にとって子どもを持つことは、理想とする家族を作ることと一体である場合、女性としての出産体験や両親のためなど、女性自身の自己実現として捉えることができる。特に、不妊治療を受療することは、子どもを切望していることであり、治療による妊娠・出産は不妊治療の成果であり夫婦の希望が叶ったことといえる。

高度生殖医療での妊娠成立後を見ると、不妊治療の経過での夫婦間の意思の確認、関係調整や経済的問題等の困難の解決には夫婦の協力・親・友人等の支援を受ける場合が多いが、特に産褥期になると想像を超えた子どもの泣き、夫は仕事に専念し始め、不妊治療での友人には育児の相談はできないといった、母親の混乱や孤立状況、疲労が存在し、産後うつや子どもの体重増加不良となって報告されるようになった。

一般に、夫婦の妊娠に対する積極性に大きく影響を及ぼすものは“子育てへの心積もり”である。妊娠は正常な出来事であり、不安定ながらも親子の結合の始まりである (M.H.Klaus, J.H.Kennell, P.H.klaus.1995)。

不妊治療の場合、夫婦は子どもができないことを悩み、子どもを切望した結果、受療する。したがって、治療によって子どもが得られたことは非常に喜ばしい希望が叶ったことになり、子どもを得ることへの切望は「子育てへの強み」であるといえる。しかし臨床をみると、不妊治療妊婦の妊娠期には“自然ではなく治療を受けて得た”というコンプレックス、流産への不安、子ども(胎児)の成長発達の不安、産褥期には、育児技術が不十分、子どもの体重増加不良等の報告が多くなってきている。

また不妊治療後の母親は、一般の母親の持つ不安に加え、“自然ではなく治療によって得たという自身の生殖能力のなさ・子どもの成長発達への不安”、周りの大きな期待や妊娠維持への不安のため過度な不安状態、さらに分娩は帝王切開術が多く、親としてのアイデンティティの発達を妨げているといえる。

福祉政策の一つとしてとして、子どもを得ることを切望した夫婦に対しては不妊治療での経済的支援が拡大されてきているが、こうした親たちに対して安心して育児ができるような支援が依然として不足している現

状がある。

一方、不妊治療から産科に移行する医療をみると縦割りであることによる不妊治療による妊娠への支援が有機的に働いていないのが現状である。

まず、不妊治療に携わる医療者を見ると、医療の躍進による情報が膨大で、受療者が医療スタッフを超える情報を基に来院する場合もありケアの在り方やカウンセリングの必要性が言われている。

また、産科では出生前診断が広く言われるようになってきているが、生命倫理に対する課題が大きく、医療者と妊婦・家族間での「思い」の一致は難しい側面が存在する。

2. 研究の目的

現在の生殖医療から産科へ移行する臨床の状況より、本研究の目的は、急速に普及している体外受精・胚移植(以下、IVFとする)に着目し、それによって妊娠・出産した女性の経過から、ペアレンティング・プログラムを開発し普及することとした。

3. 研究の方法

本研究は平成20年以降、IVFを受療している女性の妊娠成立から産褥にかけての実態調査を基に以下の手順で行った。

- 1) IVFによって妊娠成立した妊婦の産褥4カ月までを面接による縦断調査。
- 2) IVFによる母親に対する育児実態のアンケート調査。
- 3) 1) 2)の結果を基にペアレンティング・プログラムの開発・普及。

4. 研究成果

上記1) 2)の結果を基に3)を編纂した。以下に其々の結果を述べる。

- 1) IVFによって妊娠成立した妊婦の産褥4カ月までを面接による縦断調査を2011年5月~2013年11月に行った。調査の途中で母体搬送、胎児の疾病等による中断等があり研究の継続が難しかったが16名の協力を得た。面接によって、【自然妊娠との区別】【不妊治療の振り返り】【子どもの健康への不安】【子どもへの愛着】【夫との関係の再構築】が語られていた。

- 2) IVFによる母親に対する育児実態のアンケート調査を2013年2月~5月に行った。質問内容は、治療期間、不妊原因等、不妊治療での背景の他、夫婦関係、育児の協力者、妊娠期に思っていた育児とのギャップ等、56設問で、135名の協力得た。年齢は27歳から46歳の幅であり、平均39.2歳であった。治療期間は平均39.2ヶ月間、最長13年間であった。

育児状況の自由記載では、(1)体調をおして頑張る、(2)理想の生活への追及、(3)1人の人間としての子ども、(4)周囲との

有機的な関係、に大別された。

(1)体調をおして頑張るでは、体力がついていかない、不妊治療を思い出せば頑張れる、といった内容であった。(2)理想の生活への追及では、思い描いていた生活との違いではがあり、気持ちを切り替えて頑張るといった内容で母親の頑張りが記載されている。(3)1人の人間としての子どもでは、親としての責任、かわいくてたまらない存在と答えていた。

近年、IVFによる子どもの出生は37人に1人の割合であり急激に増えている。一方、IVFによって妊娠が成立した女性は母親として不妊クリニックを卒業し、一般の妊婦と変わりなく産科を通院することになる。これまで緻密な治療計画によって個別に治療を受けてきた女性にとって妊娠を機に一般と同じになることは適応しにくい状況であるといえる。不妊はコンプレックスであったが、不妊治療で成果を得たことに対する価値づけは必要であり、女性によって大切なことである。不妊治療から引き続き母親自らの頑張りによって妊娠を継続し、分娩以降の育児によって理想とする生活を追及することは非常に不安定なことといえる。また、子どもの成長は社会との開かれた関係からすすめるもので、母親だけでは限界であり、育児期の開始が母親の頑張りによって進められる状況は困難であると考えられた。

3) 1) 2) の結果をふまえ、臨床の助産師(産科勤務、不妊外来勤務)、不妊カウンセラー、看護師等との分析を重ねペアレンティング・プログラムの編纂を行った。

IVF妊婦では、妊娠後すぐに、次の子どもの治療計画を聞かれることが多いこと、出生前診断等の胎児の健康、選択した卵に対する思い、凍結保存している卵の取り扱いについて等、今回の妊娠についての迷いや不安を不妊クリニックでの相談が多いことが挙げられた。妊娠の成立は不妊知慮の目標であり願いがかなったことであるが、当事者である特に妊婦の不安は大きく、妊娠成立を喜ばない状況であることが分かった。また、不妊治療に通院していた夫婦は、産科通院となり役割分担から母体となった妻が担う部分が多くなったことによって夫との関係性は違ってきているといえる。

冊子は、このような状況から、まずは母親への適応の促進、児との愛着形成を目的に、妊娠成立から産科への移行期に介入できるものとし、「Hug・kumi」と題した。

内容は、以下の5章で構成した。

(1)これまでの経過

ここでは、不妊治療での妊娠成立を振り返り。治療の頑張るを価値づけることと、胎児の健康に対する不安から、ここまで妊娠継続できた胎芽の生命力についても統計を活用し述べた。

(2)胎児の成長

(1)に引き続き妊娠の継続と不妊治療での妊娠で注意すること、母体の変化について説明した。

(3)産院の選択等、手続き

不妊治療から産院への紹介は、ハイリスクである場合を除いて、妊婦の希望する施設となるが、どのような希望で選択したらよいのか相談が多い。そこで、一般的な分娩方法、距離、面会時間等、選択のヒントを述べた。また、IVF妊婦では、妊娠の継続の不安から母子健康手帳の交付が遅くなる傾向にある。手続きの方法等を記載した。速やかに受け入れることによって妊娠を公に認められることによって受け入れことをすすめた。

(4)今後の経過と検査

妊娠経過について記載した。また、週数ごとの健康診査の回数、出生前診断の可能な週数についても記載した。妊婦自身が自ら問い合わせができるように検査可能な週数を示した。

(5)子ども

本冊子は、この度、生まれてきた子どもに対する愛着形成が大きな目的である。思い描いていた子どもではなく、現実として考えていくように成長発達を示した。

また、「親」には子どもとともにゆっくりなるということ、ストレスの解消、周りとの関係の必要性について述べた。

冊子は、プレテストとして先の調査協力者を含む、不妊治療後の母親からの感想を基に修正を重ねた。そして、不妊クリニックにおいて持っていることが気を使わないこと、読むことが憚らないこと、に留意してほしいといったことまでをふまえプログラムとして作成し、不妊クリニックに配布した。

不妊クリニックで配布は、IVFによって妊娠成立した母親に、施設から産院への転院時期とし依頼した。

今後の課題は、冊子の効果を測定・改訂し、多くの不妊治療施設で配布し、子育て支援に役立てることである。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

宮田久枝、阿部正子、榎木野裕美、体外受精による母親の育児困難、日本こども虐待防止学会、(2013.12)

Hisae Miyata, Masakoa Abe, Hiromi Naragino Status of Adaptation to Motherhood by Woman who Become Pregnant via In Vitro Fertilization NUS-NUH International Nursing Conference (2013.11)

宮田久枝、八木佳奈子、阿部正子、榎木野裕美、体外受精によって妊娠・出産した母親の育児状況-アンケート調査から-日本母性衛生学会、(2013.10)

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮田 久枝 (MIYATA HISAE)
園田学園女子大学・人間健康学部人間看護
学科・教授
研究者番号：70249457

(2)研究分担者

榎木野 裕美 (NARAGINO HIROMI)
大阪府立大学・看護学部・教授
研究者番号：90285320

阿部 正子 (ABE MASAKO)
長野県看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：10360017